夕焼け通信 1301号　2021.4.12
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）　47

木幡智恵美

送り迎え（1）

一か月振りに帰る我が家に、どんな顔をして入るのだろうと寛大と実歩を玉湯の家に連れて入る。何のことはない。毎日繰り返していることのように、違和感なく、「ただいま」と玄関を開けた。そう、ジジババの家は、仮の住まいに過ぎなかったのだ。安堵すると同時に、少し寂しい思いも。

翌朝は、五時過ぎまでぶっ通しで眠った。昨夜までは、夜中じゅう動き回る寛大と実歩に風邪をひかせまいと、常に神経をとがらせていたということだ。朝食準備から義母の身の回りの世話を済ませ、デイサービスの送りは夫に任せて玉湯に向かう。寛大と実歩を保育所に連れて行くのだ。

産後一か月の娘の身体の負担を減らすために、当分は寛大と実歩の保育所送り迎えを夫と交代ですることにした。生後一か月の宗矢も、寒い中、送り迎えの度に連れ出されてはたまらない。風邪でもひいたら大変だ。保育所送りを私がすれば、夫は義母のデイサービスの送りをする。夫が保育所送りをすれば、私が義母をデイサービスに送る。迎えはすべてが逆になるという風に夫と分担した。

娘たちが家に帰って初めての土曜日は、朝から夕飯の支度までし、義母をデイサービスに送り出してから玉湯に出かけた。娘が育児休暇中なので、土曜日は保育所で預かってくれない。まだ体の整わない娘に、赤ん坊の世話から、寛大、実歩の世話までは負担が大きすぎる。それで、一日子守の手伝いに来たわけだ。

着いたら宗矢は眠っていた。私が宗矢をみている間、娘は寛大と実歩を連れて買い物に出かけた。宗矢はちょっとぐずったものの、揺らすとまた眠ってくれ、助かった。

お昼はオープンサンド。私は二切れ、実歩は三切れ、何と、寛大は六切れをぺろりと食べた。実歩はともかく、宗矢もぷくぷく膨れだし、どうやら、娘に似て寛大も宗矢も大食漢になりそうだ。

この日常に、じわじわと押し寄せる脅威があった。年末に中国武漢で発生した新型コロナウイルスが日本にもやってきて、感染が広がりつつあるのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

退職あいさつ状

三月三十一日、「定年により退職した」と一行だけ記された辞令をもらった。

以前役場に勤めていたとき、退職を控えた職員が最後の数カ月をすべて年休にして早々とリタイアしていくのを、だれも何も言わないのに驚いたことがある。みんなそうするものと決まっているのだと感じた。

これまでずっと年休などほとんど取ってこなかったので、最後ぐらい一矢を報いてやろうかと思いもしたが、結局最後の日まで目一杯働いた。年度替わりは、送られてくる文書も格段に増えるので、休んでいる場合ではなくなってしまったのだ。件の辞令も事務仕事に追われているときに不意打ちのようにして受け取った。何の感慨もなく、こういうのもらって終わりなんだ、と知識を一つ増やしただけのことだった。

このごろ何かと話題なのが、文科省が発信元になったSNS「#教師のバトン」で、教師という仕事の魅力を寄せてもらうはずが、その意図とは真逆の過重労働を告発する声が圧倒したそうだ。四月九日付「天声人語」でも取り上げられていた。中に、「明日で退職です。若い頃は朝から晩まで働きました。今思うと、失ったものがあまりにも多かった」という引用があった。おそらくぼくと同じ年齢の教師が三月三十日に書き込んだのだろう。教員生活の決算をマイナスと自身に報告した心中を思うと切ないことこの上ない。三月三十日にさえたどり着けず命を失った同期もいるし、病院で迎えざるを得なかった者たちの顔も浮かぶ。大きすぎる代償を払った人たちは、ぼくの周りにも確かにいる。

ぼくはといえば、それを読んで、これまで失ったものを数えたことがなかったということに気づいた。挙げろと言われればできそうな気もするが、ならば得たものも挙げなければ決算とはならない。それに収入と支出、見方を変えれば反転しそうなものもある。

四月一日から、退職のあいさつ状を書き始めた。送り先のほとんどが学校職員なのだから、型をなぞったところでしかたがないし、仕事を辞めて時間があるということは、こういうところに時間を割くということでなければならないと思うので、一枚一枚手書きで書くことにした。一人一人顔を思い浮かべれば言葉は自然と湧いてくる。ぼくにとって収入であった証拠、領収書である。

一週間かかってあらかた書き終えた。けっこう高揚した。返事も届いた。「今までできなかったことを満喫してください。」とある。「はい。皆さまのおかげで四月一日からあいさつ状書きで満喫させていただきました。」

30代フリーター　やあ、ジイさん。安保でアメリカと結びつく日本は、対立する米中に揺さぶられ、「対応を誤れば、企業どころか国全体が米中双方の供給網から外されかねない」という甘利明（自民党・新国際秩序創造戦略本部座長）の指摘を朝日新聞が紹介していた（3月28日朝刊）。

年金生活者　理念を持たないまま、くっつくか離れるかといったことに囚われた日本外交の危うさがあらわになってきた。こんなときこそ憲法9条の理念を盾に、両国に対立を解くよう交渉しなければならない。

米中が真正面から対立している現在、どっちにつくか、どっちから離れるかといったことを軸に考える限り、日本は「あちら立てればこちらが立たぬ」解決不能の状態に陥る。判断の前提となっている米中対立という現実を少しずつでも変えていくしか道はない。

日本政府は憲法9条の非戦・非武装の理念を真正面に掲げ、米中双方に対して「あなた方もこの理念にしたがって、軍事的、経済的な対立を解くべきだ。それがあなた方、そしてわが国がそろって利益を得る道だ」と訴え続けることが必要だ。

両国とも最初は聞く耳を持たないだろう。だが、確固とした理念を表明し続けることは、大国の間で右往左往するよりはナメられないで済む。一目置かれ、やがて耳を傾けられるようになるには、ブレずに執拗に訴え続けることだ。

30代　アメリカと組んで中国に対抗するしかないと考えるのが現在の多数派だろう。

年金　アメリカと同一歩調を取るということは、米中両国が繰り出す輸出入規制の打撃を受け続けることを意味する。米中対立が長期にわたると予想されている現在、それは日本経済が細っていく道を選ぶことにほかならない。

日本はいま、両国からそれぞれ「向こうに肩入れすれば、どんなことになるかわかってるだろうな」と脅されているような状態にある。それは同時に、ふたりから言い寄られているような状態でもある。求婚者たちに難題を出したかぐや姫のように、両国にあれこれ注文をつけることができるはずだ。

そんなことをすれば、摩擦が生まれるだけで、とりわけアメリカとの関係が悪化して大変なことになる、といった批判があるに違いない。だが、それをしなければ、もっと大変なこと、すなわち「企業どころか国全体が米中双方の供給網から外されかねない」事態が待っている。

30代　わかっていても変えられないのがわが政府の伝統だ。

年金　米中両国に対立の解除を迫る交渉を進めるには、アメリカ一辺倒の従来の考え方に囚われない新たな発想が必要だ。そのもとになるのが憲法9条の理念にほかならない。相手に翻弄されることなく交渉するには、小手先の技術ではなく、そうした確固とした理念が必須となる。

かつて自民党の保守本流が担った歴代の政権が軽武装、経済優先を掲げて

高度経済成長を推進できたのは、憲法9条を盾にアメリカにある程度ノーと言える外交を進めたからにほかならない。そうした構えから次第に遠ざかってきたのがその後の日本外交であり、その限界がいま米中対立の中であらわになりつつある。

30代　アメリカのインド太平洋軍司令官が上院軍事委員会の公聴会で、今後6年以内に中国が台湾に侵攻する可能性があると証言したと報じられている（AFP、3月10日）。それが現実になれば9条の盾も役に立たない。

年金　その予測は外れる可能性が高い。世界の戦争の本流が破壊と流血をともなう熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争に移った現在、そうした世界史の流れに抗することは中国にとって失うものが大き過ぎるからだ。

小原凡司という現代中国政治の研究者で笹川平和財団上席研究員が次のような指摘をしている。「最近『冷武統』という言葉を目にするようになりました。現実に軍事力を使って台湾に侵攻するのではなく、台湾に軍事的な圧力をかけて交渉のテーブルに着かせ、脅しをかけて『1つの中国』を認めさせる」（日経ビジネス、2月17日）。

「冷武統」の「冷」は「冷戦」の「冷」であり、中国は台湾統一を熱い戦争、リアルな戦争ではなく、冷たい戦争、バーチャルな戦争によって成し遂げることを有力な選択肢としていることを示している。

ソ連がいちばん国力の大きさを見せつけたのは、世界初の人工衛星を打ち上げ、さらに初めての有人宇宙飛行に成功した1960年前後だろう。核戦争寸前まで行ったとされるキューバ危機はその直後の1962年に起きた。米ソの緊張はこのときピークに達した。それは同時に緩和への歩みの始まりでもあった。

ITやAIで世界をリードしつつある今の中国を見ていると、宇宙開発でアメリカを凌駕した時代のソ連を思い起こさせる。中国のこの勢いが米中関係を緊張させ、台湾有事への懸念に結びついている。だが、冷たい戦争とはいえ今よりはハードな性格を帯びていた東西冷戦時代でさえ、危機が頂点に達したあとは緊張が緩和に向かったことを考えれば、台湾有事が現実化するのを想定するのは難しい。

ニュース日記　779

中村　礼治

憲法9条で米中の対立を超える